

## われわれの考える「資源管理」とその「技術開発」 &lt;その3&gt;

## ケニア・アフリカ伝統野菜プログラム

農業生産に於いて、その生産に資する“資源”の最たるものは、生態系を含む生産環境を構成する植物遺伝資源であることは間違いない。

本連載の「はじめに (AAI News No.126)」で挙げられた“持続可能性を踏まえた資源管理”という文脈において、古来利用されていたものの近代化により忘れ去られる運命に在った、地域の在来遺伝資源を“現役”のまま継代維持することに成功した事例として、筆者が2014年にケニアで導入を試みた、所謂「低投入持続型農業技術 (Low Input and Sustainable Agriculture: 以下、LISA技術)」としての、地域原産伝統野菜 (在来野菜) の栽培復興支援プログラムについて紹介する。

国際生物多様性センター (Alliance Bioversity International: 旧・国際遺伝資源研究所 IPRGI、以下、Bioversity) は、世界の有用植物遺伝資源の亡失を防ぎ、また遺伝資源の使用を通してそれらの保護を促進するために、ケニア・ナイロビ地域支部においてアフリカ各国・地域の在来野菜品種の遺伝資源収蔵と整理を行っていたが、

一国で200近い品種を確認し



紹介・導入ワークショップ。

たケニアで、その遺伝資源の使用を通じた保護活動の方法を模索していた。

ケニアに於いても近代化・西欧化の中で伝統作物の多様性とその利用が失われており、その根底には残念ながら、外来 (西洋由来) の野菜を食べることが「現代的」で、地域原産野菜の消費は「後進的」または「貧しい」ことであるという考え方が存在し、自生する野生植物の自家採取的利用を含めて、地域原産の植物資源の生産と消費が急速に減少していた。

そこで1996年から2004年にBioversityが中心となり African Leafy Vegetable program (in Kenya)として、作物学者や栄養学者が連携し地



現在では生鮮だけでなく、乾燥や冷凍加工したものが出回っている。

域原産野菜、特に葉物野菜が実は栄養価が高く、また生産者にとっても低投入で栽培が容易であることを検証し、その結果をテレビや

ポスターを通じて広報、また調理方法を含む様々な講習会などを実施した。その結果、ナイロビの大手スーパーマーケット等で地域の野菜が売られるようになり、特に最初は都市部の富裕層を中心に「自国の文化的遺産、伝統的ルーツの復興」を意識した消費行動が喚起され、それら野菜地方品種の消費が増大し、近郊および地方農村部への需要と生産が拡大した形となった。この“伝統野菜の栽培普及”活動は、地方小規模農家の生計向上や栄養改善を目的として、現在も様々な援助機関などで続いている。

本プログラムにおける「在来種再導入」については、a.地域原産品種なので、栽培環境の改編が不要、b.栽培が容易で病虫害に強く、化成肥料・農薬などの投入財が少なく済み持続性に長ける、c.種子調達・自家採種が比較的容易、d.栽培作目の多様性維持に貢献、e.栄養価が高く栄養改善にも有効、f.自家消費のみならず潜在的な市場価値が在る、などの優れた特徴から、LISA技術として導入試行したもののだが、文化的遺産とも云えるこれら伝統野菜の再興や、食育としての事例紹介が他の国や地域でも展開される事が期待される。